

輩更はいまるに賞讃せうさんの蛇足だそくを添そふるを要たうせず。

(完 結)

しきしまの大和心をくみて知る

なにはのわしのつゆのめぐみは

(登 磯 女)



落 椿

雨 峰 生

墓門一樹の椿あり、年ごとにさきては空しくちる、  
たまく小女の手折りて父の墓にまゝぐるあり、  
よりてこの歌をつくる

寂さびし小寺のもりかげに

春の恵みにうるはひて

咲さきし椿の七重八重

運命さだめやいかに謠うたふべき

梅の香ひにくらぶれば

浮動にめづる姿なく

櫻いづの色にくらぶれば

宿りを契る影もなし

苦悶くもんに疲する時なきも

落ちては塵に埋れゆく

夢の間しばし春ゆけば

葩はなびらすぐに地に施しきぬ

白百合、莖こゝろさみゆるせ

榮華えいげあざける情なく

咲きてはちりてゆく年を

寂さびびたることに暮くすかな

八千歳やちとせながさとぶさと

謠うたはれにける俤おとこも

今は昔しの夢のあと

其の零丁ぜいぢやうを誰れぞしる

かの庵守る僧ひとり

手折りてかざす墓の門

あゝ苦むせる石の碑

榮えはかくて消えゆくか

たゞ梵唄ぼんがの音かすか

黄泉よみちに客のゆきゆきにける

其の聖きよき日の紀念ねんねんにと

飾かざらるゝを君しるか

かねにさえゆく夕日かけ

閻伽えんがたむけゆく乙女子おとこの

父思ひでに折らるとさ

花には深き涙あり

小雨こさめのはれしわけのそら

晞あけきもやらぬ露の玉

墓はかの主まじにそゝぐとさ

誰たれぞ情なしと云ふべしや

あはれ空しくこの春も

落おつる椿つばきははかなくて

この寂寥さびに終るとも

われはまごころ寄よするかな